

非漢字から見た漢字文化

高田時雄

はじめに

中國では三千年以上にわたって漢字が用いられてきた。誰もが知るように、漢字は中國文明の精華であり、一貫してその思想、文學、科學、藝術の源泉であった。華麗にして優美な漢詩文の數々は今日までなお多くの人々に愛唱され、重厚にして莊重な漢文著作は、いつの世にも人々の心の糧となってきた。また長い興亡の歴史をこえて、漢字により書き留められた文獻は夥しい數量に及び、人類の文化遺産として貴重な記録となっている。これは漢字が中國人により長期にわたり繼續して使用されてきた賜物である。このように漢字と中國文化とは一體であって、切り離して考えることは出来ない。一方、現代の生活に眼を向ければ、新聞や雑誌を読むことから、各種申請書など様々な書類を書き、更には書信のやりとりをしたり、電化製品の取扱説明書を讀んだりなど、ちょっと想像しても漢字は中國人の日々の言語生活を支える重要な工具となっていて、漢字の使用を前提としなければ圓滑な社會生活はあり得ないであろう。近代以降の着實な識字率の向上がこの今日の文字社會を支えている。

では漢字という文字は中國の言語生活の中でどれほど重要な位置を占め、どの程度不可缺の存在であったのであろうか。漢字以外の文字で中國語を書き記すことはたして可能であろうか。またそれにはどのような困難があるだろうか。小文では漢字以外の文字で漢字を書くという試みを取り上げ、その特徴と限界を指摘することで、背後から中國における漢字文化の特質を考えてみたい。

漢字と非漢字

漢字は現代世界で使用されている他の文字體系と比較すると、やはり一種特異な文字體系であるということは否定しがたい。漢字はいわゆる表語文字 (logogram) であって、個々の文字が一定の意味に對應しているため、文字數がどうしても多くなってしまふという特質がある。意味は無制限に伸び擴がるため、それにつれて文字も増加せざるを得ないのである。ローマ字やアラビア文字などの表音文字に比べれば、漢字の字數は法外である。また個々の漢字の音的實現がすべて一音節であるのは、單音節語である中國語の特性に適うように造られているからに外ならない。漢字は外界から借用した文字ではなく、根っから中國語に固有の文字體系なのである。

はるか昔、新石器時代の中國では文字の萌芽が幾つかの地域で見られはしたが、今日の漢字の正統な血脈は中原において發展し傳承されてきた文字體系である。甲骨、金文さらに近年陸續と報告される各種の戰國文字など、この文字の古い段階の標本は數多く残っていて、歴史的な發展をかなり詳しく辿ることができる。中國ではこれを文といい、字といい、また二字を連ねて文字と言ったりしたが、自身では決して漢字と稱することはなかった。ことさらに「漢」族の文字といわずとも、それ以外には「漢」族のことばを書き記す文字はないのだから、これは自明のことであった。今日用いられる「漢字」という表現は、遼金時代に契丹族や女真族がみずからの文字を作り出した頃に、それらと對比させてすでに用いられているが、もとよりそれは漢民族自身の用語ではなかつ

た。また現代の中國で比較的しばしば「漢字」という言い方をするようになってきたのは、おそらく近代以降、西洋を媒介として出来上がった言い方であるに違いなく、Chinese Charactersなどの譯語と考えれば分かりやすい。ちなみに漢字ばかりか中國語を表す「漢語」という語もまた然りであるが、こちらのほうは時として唐代のトルファン出土寫本などに出現する。それは異民族に取り囲まれた環境に於いて、否應なく「漢」を意識しなければならなかったからで、結局その動機は漢字の場合と軌を一にしている。すなわち漢民族にとっての漢字とは、漢語が自らの言語であるのと同じく、紛れもなく自國の文字であり、その使用に当たって何等の反省を要しない、きわめて自然な存在であった。ただ厄介なことは文字数が多く、構造が複雑なために、その習得には一定の習練を必要としたという点である。したがって人口中に占める漢字使用者の割合は長く低水準に留まらざるを得なかったのもやむを得ない。

では中國では漢字以外の文字を全く知らなかったかといえばそうではない。唐代以前の文獻にすでに「胡字」とか「番字」とかいう語が散見していて、カローシュティーやブラーフミーなどのインド系文字や、さらにシリア系の文字などの存在を知っていたことは明かである。とくに佛教經典はこうした文字で記されていたから、佛教教團内部では聖典文字として尊重されたであろう。しかし中國ではこれらの文字を用いて自國の言語を書き記す試みはほとんど無かったと言ってよい。ただ唐代以降になると例外的に漢字以外の文字を使用して中國語を書いた例が幾つか存在する。以下、簡単にそれらの状況を観察してみよう。

非漢字の試み

〔チベット文字〕八世紀の八十年代に中國西北の河西地域は吐蕃（チベット）に占據され、その後七十年ほどの間吐蕃の支配が繼續する。その期間チベット語・チベット文字が公的な地位に置かれ、社會の様々な場面に浸透したことから、この地の漢族の一部では次第にチベット文字で自身の言語を書き寫すようになった。よく知られた敦煌藏經洞の寫本の中に、チベット文字で書かれた漢文文獻が相當數存在している。その内容は佛典を中心としつつも、日々の勤行に用いられた佛教の教理問答集や讚歌、更には千字文、雜抄などの童蒙書、九々の口訣、當代に流行した詩詞など、日常生活の各方面に涉っている。紛れもなく敦煌の漢族住民の中にチベット文字で中國語を書寫する傳統が存在したのである。ちなみに敦煌は八四八年に吐蕃のくびきを脱し再び漢人の手に戻るが、チベット文字の使用はその後もかなり後まで繼續されたらしく、十世紀の後半にまでその痕跡を辿ることが出来る。しかしチベット文字の使用は敦煌の漢族社會全體にひろく傳播することはなく、ごく一部に限られ、やがて歴史に埋もれてしまうこととなった。この時代の中國、とくに敦煌のような邊境地方では、漢字の識字率が極めて低いレベルに止まり、大部分の非識字層では文字使用による恩恵を享受できずにいた。一方、表音文字であるチベット文字はわずか三十文字の習得で文字の使用が可能になるため、漢字を使えない人々の中にこのような現象が生じたのは理解しやすい。當時の漢語音を寫したこれらの文獻は、當然のことながら一定の確立した表記法が存在したわけではないために、相互にゆれが見られるが、細かに分析していくと大きく二つの類型に區別することが判明した。一つは唐の盛時に中國域内はおろか周邊諸國にまでおおきな影響を及ぼした首都長安の言語を基礎とする音系を反映するもので、もう一つは河西地域の土着の方言を反映するものである。後者は吐蕃支配期以降に敦煌に成立した地方政權である歸義軍節度使治下において次第に影響力を持ち始めた言語で、相對的に新しい時代のものはほとんどがこちらの部類に屬している。しかし重要な点は、このようなチベット文字の使用が漢字の權威と優位性になんらの動搖をも與え得なかったことであろう。吐蕃支配期にも、その後の時代にも漢字の使用が壓倒的であることからそれは容易に想像されるが、一方でチベット文字で寫された文獻のどれ一つを取っても、漢字

で書かれた文献と完全に重なりあい、チベット文字書寫文献が何か特殊なジャンルのもののみに用いられたというようなことではないことから、チベット文字が單純に漢字の「代用」として存在したことが分かるのである。チベット文字は畢竟、漢字を十分に習得していない、あるいは全く漢字を知らない漢族の便宜的な文字使用に過ぎなかったといえよう。いずれにせよこのチベット文字による漢語書寫の試みは、現在知られる限り最も古い事例である。

同じ敦煌寫本のなかにチベット文字ではなく、タリム盆地南縁のオアシス國家コータンで用いられたブラーフミー文字によって漢語佛典を書寫した例も見出される。十世紀の敦煌の歸義軍政權はコータン國と姻戚關係にあり、使者の往來も頻繁であったことから、藏經洞からはかなりの数のコータン語文獻が発見されていて、このコータン・ブラーフミー書寫佛典もその中の一つである。これは實例が少なく、チベット文字の場合と違って細かな分析が出来ないため斷言はしかねるが、敦煌の漢人の手になるものではなく、漢語を善くするコータン人（或いは中國系コータン人）の手になるものではないかと思われる。ここには参考までに附記する。

〔パスパ文字〕次いで漢字以外の文字による漢語表記はモンゴル治下の元朝期に行われたパスパ文字の例である。パスパ文字は元朝の國師であったパスパ（パクパ・ラマ、'Phags-pa bla-ma）によって作られ、至元六年（一二六九）、國字として公布された。この文字はモンゴル治下の一切の言語を書寫すべく構想されたものであったが、實際にはモンゴル語の他には漢語を初めとする幾つかの言語の標本が残っているにすぎない。パスパ文字は一方的に上から與えられた文字である。したがって今日残されている漢語を表記した材料も、聖旨碑をはじめとする公的な碑文に記されたもの、さらには官印や紙幣、錢貨、銅權（はかりの錘）などであって、すべてが色濃く公的な性格を帯びたものであることに注意すべきである。器物上の材料以外にも、『蒙古字韻』や『事林廣記』に収める「百家姓」、またかつて神田喜一郎により紹介された宮内廳書陵部所藏の『臨川吳文正公草廬先生集』附録「大元累授臨川郡吳文正公宣敕」など書物の形で残っているものもあるが、碑文の場合と同じく、多くが漢字で書かれたものとの合璧の體裁をとっていて、敦煌のチベット文字文獻のように、パスパ文字だけで漢語を表記したものはほとんどないと言ってよい。つまりパスパ文字が國字であるかぎり一應の敬意を拂ってそれで書いておくと、パスパ文字だけでは理解に不便であったため、漢語をも併記せざるを得なかったというのが實情と思われる。印章や貨幣の類なら、何が書かれてあるかは前もって分かっているか、或いは分かる必要すら必ずしもなかったかも知れない。しかし少し長いテキストであれば、漢字がなければその理解はパスパ文字だけでは困難であったに違いない。パスパ文字は漢語を寫すための獨立した文字となることはなかった。そして何よりも民衆に浸透することはなかったのである。

官製のお仕着せ文字であったために、パスパ文字は元朝の瓦解と共に公的な地位を失ったが、意外にも限られた範囲内でかなり長く命脈を保ったことが知られている。私印の世界で印章の文字として用いられた場合がそれであり、我々は後世にもしばしばパスパ文字を刻んだ印章を眼にすることが出来る。しかしこれは趣味的な意匠に關わる問題であり、本來の文字の世界とは關係がない。

ちなみにパスパ文字が實際にはチベット文字の字形を若干變化させただけのもので、本質的にはチベット文字そのものであることから、パスパ文字表記の方法が敦煌におけるチベット文字使用に由來すると考える學者もあるが、それを具體的に證明することは困難であり、當面は關係ないと考えるべきであろう。ただチベット文字にせよ、パスパ文字にせよ、これらの文字で漢語を寫す場合、いずれも聲調の區別が明瞭なたちでは表現されておらず、したがって漢字を表記する文字として不完全であるという點は指摘しておかねばならない。

〔ローマ字〕ローマ字は十六世紀末に始まったイエズス會士らカトリック宣教師による布教とともに中國に持ち込まれ、漢字の標音に用いられた。マテオ・リッチの『西字奇跡』やニコラ・トリゴーの『西儒耳目資』などはその代表的な遺物である。しかしローマ字によって中國語を表記

しようとする本格的な試みは十九世紀のプロテスタント・ミッションの活動を待たねばならない。アヘン戦争以後、何度かの条約締結を経て、プロテスタントの布教団が大舉して中國に押し寄せることとなったが、かれらは福音を伝えるために聖書や教理書を各地の中國語方言に翻譯することにきわめて熱心であった。明末清初のイエズス會士が知識人を布教の對象としたのとは異なり、彼等の目標は一般庶民であったために、布教地域の方言を學び、それをを用いて布教活動を行わざるを得なかった。知識人に廣く用いられる文語では、人々の理解をかちえる上で大きな障害があったからである。そのため方言譯の聖書やキリスト教關連の冊子が數多く印刷配布されることになった。宣教師たちはこの事業に大きな努力を傾注したが、しかし漢字が讀めなくては折角方言に譯しても神の言葉を理解することが出來ない。多くの中國人改宗者は漢字を識らなかつたからである。そこでプロテスタント宣教師たちは早い時期からローマ字で中國語方言を表記するシステムの開發に取り組んだ。彼等は漢字に代わって中國語を表記する新しい文字としてローマ字による一貫した表記システムを作り出した。その中で最も成功を収めたのが閩南語に適用された教會ローマ字である。長老會（Presbyterian Mission）の宣教師たちは廈門でこの表記システムを積極的に教育に採用し、ローマ字によって中國人改宗者に日常の言語を書き表すことを勧めたのである。別名を白話字ともいうように、教會ローマ字は漢字とはまったく獨立して閩南方言を表記するもので、そのため語を單位とする分かち書きを採用している。當初、中國人教徒たちもこんな文字が漢字に取って代わり得るとは思わず、猜疑の目を向けていたが、次第にシステムが完備し、教材が整ってくると、偏見から解放されるようになったという。事實、この教會ローマ字は閩南語圏の教徒のあいだでは極めて廣範圍に用いられ、特に台灣では盛んであり、紆餘曲折を経てその使用は今日でも繼續されている。

リッチたちイエズス會士が考案したポルトガル式のローマ字表記は、當時最も權威のあつた南京官話の音を寫したものであつたが、その表記法では南京官話の五種の聲調を書き分ける記號を備えていた。おそらくその傳統を受け繼いだものと思われるが、教會ローマ字でも同様に閩南語の八聲調を區別する記號を持っていた。これによって中國語音をほぼ完全に過不足なく書寫できるようになったわけで、それ自身では非常に完備したシステムであつたといえる。

現在、台灣では今いわゆる台灣語をこの表記法によって書こうという運動があり、それを熱心に實踐している人々もかなり存在する。そこではまた日本の漢字假名混じり文と同じような、教會ローマ字に漢字を交えた表記が見られるのも注意される。もちろんこういったローマ字表記運動の前途は様々な條件があつて決して樂觀視し得ないが、中國の言語を漢字以外の文字で表記して一定の成功を収めた事例として注目すべきである。しかしその成功は閩南語という一方言を表記する限りにおいて成功したのであり、この方式を中國語一般に適用しようとするならば、中國語の分裂は不可避と言わねばならない。漢字という紐帯がなければ、ヨーロッパでゲルマン諸語が英語、ドイツ語、オランダ語などの國語に分かれ、ロマンス諸語が、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語などに分かれているのと同様のことが、中國語にも起こり得るであろうとはよく言われることだが、ここでもそのジレンマが露呈せざるを得ない。漢字は方言の差を超えて中國語を一つにまとめあげるといふ大きな機能を果たしており、漢字に替わってその機能を擔う資格のある文字を探すのは不可能と言っても過言ではない。

〔アラビア文字〕一般に、歴史上、宗教と文字使用とはきわめて密接な關係があり、ある社會集團がある宗教に歸依した時には、その聖典の文字を採用することが多い。イスラーム圏では例外なくコーランと同じアラビア文字が用いられている。したがって中國のイスラーム教徒である回族がアラビア文字を使用するのはきわめて自然である。中國各地の回族のあいだでは、小兒錦（或いは小經）と呼ばれるアラビア文字による漢語書寫がかつて廣範圍に行われていたし、現在でもなお使用されているという報告がある。しかしこれも所詮は便宜的な表記のレベルを出るものではなく、

また當然ながらイスラム教徒の枠を超えることはあり得ないことからすれば、一個の特異例として扱わざるを得ない。ただ現在キルギス共和国に住むダウンガン人（東干人）は、十九世紀末に中國の陝西、甘肅から中央アジアに移住した回族で、その言語は北方官話の一種であるが、彼等は舊ソ連時代にキリル文字による表記法によって自らの言語を書くようになり、それにより新聞も発行されていた。これも教會ローマ字の場合と同じく、一表音文字によって中國語が表記され一定の成功を収めた例と見なすことができるかも知れない。しかしダウンガン人が文化的にどれほど中國人としてのアイデンティティを持っているかということを考えれば、同一枠内で考えることは出来ないであろう。

おわりに

歴史上、漢字以外の文字で漢語を書き寫す試み、すなわち非漢字の事例の幾つかを上に見たが、いずれも漢字の優位を覆すほどの条件を備えたものは存在しなかった。またパスパ文字の事例を除いて、多くの場合、その擔い手は何らかの理由で漢字に習熟するに至らない、社會の下層乃至邊縁部に位置する人々が漢字の代用として用いたものである。強固な宗教的動機が存在する場合を除いて、条件さえ許せば彼等は漢字の學習を望んだと思われる。三千年に及ぶ漢字の歴史は中國文化の統合のシンボルであり、漢字の使用を維持することに對する無言の壓力が存在する。また漢字という文字は、その獨得の表語的性格のおかげで、方言の相違を克服して、中國社會を統合する實用的機能を果たしている。

字數の多さと構造の複雑さによって、中國では漢字の識字率が相對的に低いレベルに止まっていたため、歴史上、小文で見たような漢字以外の文字使用が間々行われることにもなった。しかし職業ごとに必要不可欠な數だけの漢字を習得しておれば十分と見なす機能的識字（functional literacy）という考え方もあり、その場合には清朝期の識字率は決して低くなかったとする學者もある。いずれにせよ清朝末期から今日に至るまでの百年間に、識字率は目に見えて向上したことは間違いないし、簡體字の導入によって一層廣い範圍の人々に文字使用が擴大したことも事實であろう。三千年の歴史を受けて、漢字使用は確實に傳承され、發展しているといえよう。